

## 令和3年度 文学部国文学科 学校推薦型選抜（一般）講評

三枝昂之「短歌批評の領域」（藤井貞和編『短歌における批評とは』（岩波書店、一九九九）による出題である。本文の主旨は明快である。近代短歌の成立期に、和歌の伝統に根ざしながらも、近代詩や散文とは異なる表現様式を打ち出してゆこうとしたとき、歌人たちは三十一音しかないという形式的要素を、むしろ可能性として捉え直そうとし、「短さの豊かさ」という価値観を批評的に提示したとまとめられよう。しかしそれは単に「短い」ことは「豊か」で「良い」ということを意味する訳ではない。この価値観の成立の事情をふまえつつ、価値観自体を批判的にとらえる視点もほしいところである。課題文の内容を的確に把握する読解力が求められるが、論旨の展開のための例示が意味するところを汲み取る想像力、理解力も併せて必要とされる。それらを踏まえ論述する表現力が解答には求められる。さらに、国文学科にふさわしく、求められる基礎的な見識は読解の助けにもなることから、平素の学習は大切である。

以下、各問ごとに講評を記す。

### 【問1】

平均すると7割程度の正解率。オ。「肉薄（肉迫も可）」の出来が悪かった。漢字の問題は、日頃から問題演習に取り組んでほしい。エは「愛惜」と「哀惜」も正解とした。

### 【問2】

古典文法の設定問である。難易度は高くないはずだが、出来は分かれた。（全般的によくできている受験生と、まったく文法ができない受験生と）

古文ないし漢文の文法・語法の基礎を問う問題は、毎年必ず出題される。文章を正確に読み解くために必要な基礎的技術を身に着けているか、判断されるので、しっかり勉強しておいてほしい。

### 【問3】

正解は「漢詩」であるが、高校生には難問だった。正解率は1割程度。

### 【問4】

傍線部は文章の冒頭近くにあるが、文章全体の構成をとらえて読み取ることが必要である。おさえるべきポイントを以下に列記してみる。

傍線部「歌論史の節目」は、直前の「この問い」と対応していて、次の行の「短歌の三十一音という量には本当に時代を支える意義があるのか」というところが「その問い」の内容である。ここをおさえることができれば、「量」の「意義」が問われていることがわかるはずである。

「量」の「意義」については、3ページに「表現量の意義」についての記述があり、こうしてで始まる段落で「近代以降の歌人たちは、和歌とはなにか、和歌にはどんな意義があるのか、という問いに必ず表現量の意義を加えねばならなかった」とまとめられている。

近代以降の歌人たちは、量の問題抜きには自分の短歌観を語る事が不可能になったのである。

では、近代以前はどうであったかという、2ページの1行目に「短歌形式への信頼が自明の前提になっていたら、こういう発言は出てこない」とあり、後鳥羽院や武者小路実陰の引用の後に、「短歌形式は、存在自体の意義を問われることのない詩型」と書かれている。

近代以前は自明の前提だった短歌の価値が、近代になって自明の前提ではなくなったことで、表現量の意義を明らかにし、「短さの豊かさ」を視野に入れた短歌観が生まれたのである。

こうした要素を過不足なく規定の字数内におさめて書くことが必要であったが、傍線部の付近しかおさえていなかったり、表現量のことしか書いていなかったりした答案が散見された。なんとなく本文からつまみ食いをして書いているだけの答案と、ていねいにポイントをおさえて書いた答案とで差が出た問題である。

#### 【問5】

小論文の問題である。採点基準は以下の四つの観点からなる。

- ① 自分自身の価値観の考えの提示
- ② 具体例や体験を挙げる
- ③ 論理性
- ④ 表現・表記

自分の考えを論理的に展開してゆくためには、根拠となる具体例や体験が適切であるか、自分の視点に基づいているかなど、十分に考えたうえで書くことが大切である。一般論で没個性的なもの、具体例や体験が適切でないために、論理性に無理や破綻が見られるものもあった。設問をよく読み、その内容と論述するためのポイントを把握し、根拠となる具体例や体験の妥当性を検討したうえで書くことが求められる。そのような点に留意すれば、文章を論理的に展開することができるであろう。表現・表記においては書き誤った例も見られた。一字一句、普段から大切にすることの基本を改めて確認したい。

本文の内容と論述については以下の通りである。

〈短さの豊かさ〉を「表現量が少ないが故の解釈のしやすさ」として捉えている解答が多く見られた。一方で、「表現量が少ないが故の解釈の自由さ」として捉えているものも多く散見された。いずれの解答も、表現の解釈の問題として〈短さの豊かさ〉を捉えているものだが、本文においては、第一義的には表現行為それ自体にまつわる問題として論じられている。解釈のしやすさ、解釈の自由さという論点を導入して論を展開する、ということであればよいのだが、単に表現行為の問題と表現解釈の問題とを混同しただけのように見える答案が多かったのは残念であった。

具体例や具体的な体験の説明において、やや安直なものが多かったことも遺憾なことであった。その具体例・具体的な体験がどのような意味で〈短さの豊かさ〉の問題と関わっているかを丁寧に説明する必要があるわけだが、それが十分になし得ておらず、結果、一般論や言

わずもがなの常識的見解に流れてしまっているものが多くあった。問われていることに合致する具体例・具体的体験を臨機応変に想起する柔軟な知性と感性、そしてそれを的確に説明できる強靱な文章表現力が望まれる。

問いに、「このような価値観に対する」とあり、「このような」が指示する点を的確に把握した上で、それ以下の求めにも応じ、解答することがまず求められるが、その部分でも既に差異が見られた。

つまり、論理の一貫性、表現の工夫にも関わり、読み取りの有無が、論旨に沿った具体例や具体的な体験の取捨にも影響していることが明らかになった。問いに正対する、すなわち、何を求めているかを分別するという基本的な事項は最低限必要である。